

「アメリカ信仰」を 捨てよ

石原慎太郎
一橋総合研究所

二〇〇二年からの日本戦略

「アメリカ信仰」を捨てよ

発行日 初版第一刷 二〇〇〇年十一月五日

著者 石原慎太郎

一橋総合研究所

発行者

松下 厚

発行所

株式会社 光文社

東京都文京区音羽一六十六 二二二八〇二

編集部 〇三三九五八 一六三

販売部 〇三三九五八 一一二

業務部 〇三三九五八 一二五

振替 〇〇一六〇三 一一五三四七

* 落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします

印刷所

萩原印刷

製本所

ナシヨナル製本

©Shintarō Ishihara, Hitotsubashi Sōgō Kenkyūjo 2000

Printed in Japan

ISBN4-334-97279-9

■
※本書の全部または一部を無断で、

複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、

禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、

日本複写機センターにご連絡ください。

Tel.03-3401-2382

石原慎太郎

一橋総合研究所

「アメリカ信仰」を捨てよ

二〇〇一年からの日本戦略

NB

01年03月28日

「アメリカ信仰」を捨てよ

目次

前書きに代えて 邪宗門、アメリカ信仰への決別 15

第一章

今、目の前にある日本の危機

日本の目前に迫る新しい冷戦 20

朝鮮半島がベトナム化する恐れ 23

ノドン百発を実戦配備したとされる北朝鮮 26

クリントンとブーチンにとって「日本は米州のひとつ」 29

ペンタゴンレポート「アジア二〇二五年」に書かれた本音 33

アメリカ軍は韓国・日本から早晩いなくなる 36

バーチャル核武装に踏み切る日本 38

ロシア製核弾頭は一個二億五千万円で売られている

41

中国の男性過剰人口二千五百万人の暴発危機

45

一枚の写真が示す危ないぐだり外交

50

南北国交正常化で日本が払う必要のない巨額の補償

53

日本の二十五都市を仮想標的にしている中国のミサイル

57

新しい冷戦はホットウォーの危険をもちあわしている

62

第二章

「アメリカ信仰」を捨てよ

日本文化の完全崩壊を阻止せよ

68

アメリカ商務省の日本部長廃止は収奪システム完了が底意

72

日銀はアメリカFRBの下僕に成り下がるな

75

今や「超」お買い得となった長銀新生銀行

81

日本のインターネット料金はアメリカより安い

87

小渕前総理の死去後に急展開したNTT問題の不気味さ

90

IT革命の先陣を切ったのはアメリカではなく日本だった

95

盗聴ネット「エシロン」はアメリカの国策

101

反捕鯨という日本叩きは人種偏見

104

アメリカ信仰を捨てないと日本は独自の戦略を持ってない

111

第三章

「知恵」でつかむ日本の国益

アメリカは決して一枚岩ではない

120

ペンタゴンが狼狽するソニー・プレステ2の技術

125

第四章

完全なる日本の防衛

日の丸に感動しても右翼と決めつけるな

164

IT革命を警察に取り入れたニューヨーク市長

130

イギリスの悪知略にしてやられた最貧国ODAの債権放棄

133

国を危うくする食糧自給率の極端な低下

137

アメリカが仕掛ける「コメ戦略」の落とし穴にはまるな

141

日本はじつは自然資源大国だという逆転発想

144

ハーレー・ダビッドソンが日本メーカーに負けない理由

148

日本再生を可能にする複眼的戦略

152

知恵をつむぎだす「精神」の崩壊を立て直せ

156

神の国発言を「注目し期待する」ワシントン・ポスト社説 ————— 167

外国人に自国を守らせた国が必ず滅ぶのはローマ滅亡でも明らか ————— 172

自主防衛論議をタブーにしてはいけない ————— 174

中国軍艦の日本周航には自衛艦をシナ海域に整然と並べよ ————— 178

クライシスとは常識の分水嶺を越えてしまうことだ ————— 182

阪神淡路大震災の死者六千余人のうち三分の一は助かっていた ————— 185

テポドン抑止に空母二隻と戦艦を大集結させた米軍 ————— 189

完全なる防衛に欠かせない首相公選制 ————— 194

改憲論では決まってマスコミが捏造するアジアの反発 ————— 198

アメリカの「核の傘」は日本人の幻想にすぎない ————— 203

TMDの自主開発を日本の完全なる防衛のシンボルにせよ ————— 208

第五章

日本から世界への発信

世界が不思議がる「日本の三つの謎」

214

日本に戦争責任を問うなら欧米こそ自省せよ

219

ヒトゲノム解析では日本が最先端先進国だ

226

「日本型IT革命」が次世代世界の牽引車になる

231

軍需を民需に転換利用するテクノロジーは日本が世界一

235

対米最終経済戦争はIT自動車で日本が勝つ

240

飛べ世界の空を、自分の翼で飛べ

242

見返し 著者近影 石原慎太郎（中央）を囲む市川周（右）と鈴木杜治（左）
撮影 白瀬恒彦 ブックデザイン 佐藤晃一 デザイン室

前書きに代えて

邪宗門、アメリカ信仰への決別

石原慎太郎

最近の日本に蔓延している風潮の一つは自分で説明のつかぬ焦りと不満に浸されたままの無力感です。政治を含めて国に関わることがらについて考える時多くの国民がイライラと諦めを合わせて感じながら、それをどう処していいのかわからぬまま過ごしています。

なかなか上向きにならぬ景気のせいもあるが、その景気一つ見ても、我々はじつは国家として国民として不条理な立場に置かれたままです。端的にいつてなぜ、世界で一番多くの外国に、そして誰よりもアメリカに一番多額の金を貸している日本がいつまでも景気がふるわず、世界で一番多額の金を借りているアメリカが好景気に湧き続けているのか。

その訳は日本がアメリカの金融に関する悪辣なほど巧妙な世界戦略に一方的に巻き込まれて、実質的な収奪の限りを尽くされているからにほかならない。

そんな日本のことを隣の中国人たちも「柔らかな土」と呼んでいる。その訳は、相手が日本なら手だけでも簡単に好きなだけ掘れるということです。

すでに水爆を保有し日本の大都市向けに核装備可能なミサイルを数十基配備している中国に、合わせてのべ六兆円もの経済援助をしている日本という国はよほどおめでたい、というより最早愚かでしかない。

アメリカの高官たちは日本政府のことをアメリカの東京支店と呼び、大蔵省のことをアメリカ財務省の東京支局と呼んでいる。ブレジンスキーが先年発表した論文の中で日本を「アメリカの下僕」と記していた通り、今日の日本の対外的姿勢は屈辱としかいいようがない。

そしてなお、そんな日本のじつは持てる真の力を誰がよく知っているかといえばそれは日本人自身である以上に、アメリカ人であり中国人であるという皮肉な構図をまず知ることから私たちは出直さなくてはならないと思う。自分をよく知らぬ者にいったいどうして確かで、強い、そして正統な自己主張ができるだろうか。

この惨憺たる日本の自己放棄はいったい何によってもたらされたのだろうか。

それはかつての戦に破れはしたが、有色人種の中でただ一人この近代国家を作り上げた日本を一種のエイリアンとして恐れたアメリカが戦後の統治を通じて徹底して行った、まず意識、そして下意識からの日本解体の成果なのです。

その作業を通じて我々は日本自身のそれに代わる彼らの価値観をあてがわれるままに身につけ、それによっての他力本願を培われてしまった。

アメリカへの依存、依頼は日本自らの自己主張を塞いでしまい、自らについて自らが決定するという姿勢を淘汰してしまつたとしかしいようない。それはもはや信仰に近い屈従の姿勢です。

繰り返して記しますが、トインビーが『歴史の研究』で指摘したようにいかなる巨大な国家も衰微し崩壊もするが、そのための最も危険な要因は国家が自己決定の能力を失うことです。国家に関するその歴史の基本原則が今の日本ほど当てはまる例は他に無いのではなからうか。

このままでは中国の李鵬前首相がかつていい放つたように日本という国家は十五年後には実質的に消滅してしまい、ブレジンスキーがいったようにどこぞの国の下僕に成り下っ